

☆町家のあるじ

町家のあるじはおだやかで優しい方である。町家合宿とその参加者（不登校やひきこもりの経験があって不安や緊張が強い子も多い）のことを理解してくださり、ご迷惑をおかけすることもあるが、毎年貸し切りにすることにも（たぶん特別に）快く応じてくださっている。昨年の猛暑の折には、宿泊者の体調を気遣い、「他での宿泊を探されてはどうか、キャンセルされる場合は無料でいいので」とあるじから言ってきてくださった（結果としては2日前に台風が来て気温がわずかに下がり、無事に決行）。どちらかというとなり顔であまり表情が変わる方ではないのだが、その気遣いや丁寧な仕事ぶりは、毎年町家に行って、掃除や手入れの行きとどいた町家に泊まれば実感できる。

ゴミ1つ、ちり1つなく布団の配置も扇風機のコードのまとめ方も美しいまでに完璧に整えられている。あるとき、他のスタッフが町家のあるじに聞いたところによると、ここまで1人で完璧に掃除をしているのは、「お客さんとできるだけ話をしたくないから、絶対にクレームがつかないように」なんだそうである。掃除が完璧な理由としては完全に想定外で驚いたが、結果としてクレームも要望も何もおきないほどに居心地のよい空間に仕上がっているのである。



1階の客室を出たところの休憩スペース。和風と言うより異国情緒？

☆町家のバージョンアップ

掃除と手入れが行き届いている町家は、それでいて殺風景ではなく、毎年宿泊するたびに、バージョンアップしている。母屋から離れにつながる通路が1階だけでなく、2階にも作られていたり、トイレや洗面台がリフォームされていたり、かなり手をいれておられるのだと思う。大がかりなものだけでなく、坪庭に昨年にはなかった美しい苔が敷き詰められていたり、アンティークの小物が飾られていたり、おそらくあるじが1人で手作業でされているバージョンアップもたくさんある。

☆バージョンアップしても不便だからいい

町家（正式には京町家と言うらしい）は古い建物である。その上、この 10 数年の間に、この町家は重要文化財の指定を受けている。維持だけでも大変なのは想像に難くない。それでもエアコンもテレビも風呂も部屋の鍵もないが、その便利なものがない不便さを情緒に変える技とでもいうのだろうか。むしろ便利であってはならないぐらいに整えられた、完成された場になっていると感じている。不便なものをなくすことは簡単かもしれないが、そうではなく、その不便を受け入れられるような工夫があるのである。



客室のふすま。正面のふすまの向こうはもう一つの客室。右のふすまは出入り口。

☆不便が情緒になれば楽しい

エアコンはなくても夏には 1 人 1 台の扇風機があり、冷凍庫には自由に使えるアイスノンが入っているし、冷蔵庫には麦茶も入っている。これまでの町家合宿で、熱中症で倒れた参加者もスタッフもいないし、私自身も暑さで寝れなかったという記憶はない（汗だけでも寝れるのは体質かもしれないが）。蚊の大群に襲われることもあるが、その数年後には各部屋に蚊よけグッズはがおかれるようになっていたし、こちらは何度も泊まっていればどここの部屋が暑くて、蚊が多いかなどはわかってきて対策もできてくる。

不便は不便なのだが、それを不便で面倒がるのではなく、情緒として楽しむ。それが町家なのだと思う。もちろん住むとなれば話は違うとは思いますが、私自身は、この町家の情緒が楽しく、それを参加者やスタッフにも味わってほしいと思っている。



客室からの坪庭。向こう側が1階共用スペース。

☆また来年も

やはり、私はこの町家が好きである。不便さを情緒に変える、あるじのこだわりやホテルや旅館にはない、少し不便な非日常を感じられる、整えられたこの町家が好きで、落ち着くというよりは、不便への工夫である意図に乗っ取ったルールの中に自分の身を置くという、独特の少しの緊張感が好きなのである。

この町家でなければ、町家合宿もここまで続いていなかったかもしれないと思う。13年前に町家合宿をしようと思いついたのも、この町家を含めた京都の情緒を、どうしたら広く知ってもらえるかと、友人と語り飲み明かしたことが原点である。この原点の思いを、毎年繰り返してきた町家合宿の中で忘れていたのかもしれないとここまで書いてみて思う。

この10数年の中で、出会うこどもたちの状況も、私自身の生活スタイルも変わってきているなかで、改めてこの町家の不便さと情緒、そしてそこで行う町家合宿の意義を問いながら、来年に向けて考えていこうと思う。



共用スペースからの美しい坪庭。手前の金魚が元気かどうか毎年気になる。